

東京会場

若い世代のアイヌから

8月23日(水) 15:30~17:00

※9月5日も同様の内容

講 師

鮎田英一郎



はじめまして、よろしくお願いします。今日は大したことは話せませんが、私の経験と、アイヌの血をひいている立場から見たアイヌの世界観みたいなものをお話したいと思います。

私は、関東の神奈川県で生まれ、東京で育ち、中学を卒業してから9年間アメリカに渡り、ニューヨークの方に留学をしていました。私の父親が北海道の白糠出身の「アイヌ人」で、母親が東京在住の日本人です。私の父親は木彫師で、母親は芸術家でしたので、北海道の木彫、工芸品、現代美術等に親しむ環境で育ちました。

なぜ私が、あえてアイヌ民族を「アイヌ人」といった言い方をするかというと、人それぞれ価値観の違いはあるかと思いますが、私の中でアイヌはアイデンティティであり、一つは人種として捉えていますので、そういった理由からあえて初めにアイヌ人という言い方をさせて頂きました。人によってはアイヌ人という言い方をすごく嫌う人もいます。ですが、私の場合はあえてこだわりを込めて使っております。

私の父親が育った環境は、アイヌ式と日本文化の間みたいな形だったと思います。父方のおじいさん、おばあさんは、アイヌ語はそれなりに話せたかと思いますが、子供の前などでは日本語で話していたと思いますので、父はそれほどアイヌ語を知りません。私自身、アイヌ語は一切教えられていません。日本語と英語が、私の主な言語となります。父親とのコミュニケーションにおいては、やはり基本的には一般的な日本式ですが、時々一般的な日本とはちょっと違った価値観の存在が感じられる時があります。それはどちらかという癖みたいなもので、説明しがたいのですが、個人のクセというよりはむしろ民族特有のものといったらよいのでしょうか。

質問して頂ければ、それなりに答えたいと思いますので、何かありましたらどうぞ。

質 問：アメリカに行ったのは、どういう理由ですか？

鮎 田：両親が小さい時に離婚してしまったので、そのあと母親の方で育てられたのです。母方、父方ともにアメリカに親戚がいるので、中学を卒業した時点で、アメリカに留学させてもらいました。留学の主な目的は、英語を修得するとともに、心の中では「人」を勉強したいという思いがありました。

ニューヨーク市では、世界の200以上の言語が市内で使われているといわれていて、英語だけの場所ではないところでしたし、多種多様な人種、つまり民族の集合したところでもありました。

質 問：ずっとニューヨークでしたか？

鮎 田：はい、そうです。そこで9年近く住んでおり、学校に通っておりました。私がメジャーにした科目は建築関係で、今現在は全くそれとは関係のない仕事に就いておりましたが、当時の私にはそれなりにとても大切な時期だったと思っています。後で、このことについて少し話したいと思います。

皆さんがご存知の通り、アイヌの言語そして文化は、日本のものとは全く違いました。アイヌの文化はやはり北方文化圏の中にあり、北海道の場合、血の濃いアイヌは外観、骨格、体臭、肌の色などが日本人とはかなり違います。特に道東のアイヌは、蒙古斑が出ないということが常識だそうです。私も生まれた時、蒙古斑が出なかったと両親から聞いています。もと国会議員の菅野茂さんの著書によると、蒙古斑があったようなことが書いてありますが、少なくとも私の父親の出身地である白糠の方では蒙古斑が出ないということがアイヌの証だということをいつも聞かされています。そのことに関しては、僕はいくつかの本に目を通しましたが、何も触れられていません。しかし、そのような事実もあるということでしょう。

サハリンの先住民族の方々は、どちらかというと東洋的な顔つき、骨格を持っていますが、不思議なことに北海道のアイヌは北方文化圏にいながら、かなり外見が違います。NHKでアイヌのDNAを調べたという番組が過去に放送されたのですが、旭川の方で2~3人のDNAのサンプル検証だけで結果を出してしまったようです。父親の話では旭川といいますと、日本人とアイヌの混血した方が多く、どちらかというと日本人っぽい顔つきのアイヌの人が多いようです。時代の流れにより、やむを得ないことです。

話は少々変わりますが、私がニューヨークに在住していた頃は無数の国籍、世界中の人たちとお付き合いさせてもらい、そして私の父親、父親の友人たち、白糠の友達やいろいろ見てきたアイヌの人たちを人種的に分けると、私の中では、どちらかというと中近東とか地中海の人たちがすごく人種的に近いのではと、感じてしまいました。自分自身も少々違うのですが、肌の色、体臭などを色々かぎわけた結果もあり、特にそれらの人たちの体臭は無性に懐かしい匂いだと思わされたというのが感想で、違和感を全く覚えられなかったのを思い出します。

今の若いアイヌ民族出身者の多くは、私のような混血が多いのが現状です。私自身、民族の定義というものの自体に対して少々理解に苦しんでおりまして、例えば人種的に近く、同じ文化に深く精通しているのであれば、同じ民族だということは解釈できます。しかし、もしそうではない場合、自身に少量の血又は全く入っていないくても、アイヌ文化を知らずしても、「アイヌ」だと本人が言ってしまうえばアイヌとなるそうです。

私の場合、アイヌ人であり日本人でもあります。そのへんは年をとっていくにつれて身体的特徴が日本人というよりはアイヌに近づいて、いわゆる特有になってきてしまったという感じで、どちらかというとアイヌの方が身近に感じている今日この頃です。私の文化的背景は、むしろ日本的であり、またアメリカにいましたので米国的でもあるのが現実なので、少々複雑な思いがあります。私は生まれた時からごくごく自然にアイヌと日本人の合いの子として育てられてきましたので、私は両方だということになってしまうのですが、今こうして皆様の目の前にいますので、アイヌ民族出身者ということですかね。どちらにしてもアイデンティティの尊重、自己認識が大切だと思います。

質問：アメリカにおいでになって、アイヌというのはどの程度理解されましたか？

鮎田：少なくとも日本よりは、理解されていたと思います。

質問：私は実は朝鮮戦争の間、沖縄の基地にいたんです。その時にお前の人種は何だとすごく聞かれました。それで、我々は昔の教育を受けましたから、大和民族だと言う。すると、そんな民族は世界中どこを探してもい

ない、お前はコリアンか、チャイナか、あるいはアイヌであるのかと問われるのです。沖縄というのは、はっきり言えばクマソ系の血が濃いから、日本の中ではアイヌと体格的にも、先ほど出ました体臭とかね、毛深いとか、こういうような部分で非常によく似てるんですね。1人だけの時はわかりませんが、50人100人集まった時にはね。琉球民の方がはっきりしているから、お前はいったい何人だと聞かれたときに、答えられないんです。誰もわからないんです。そういうことに対して私らの受けた教育から言うと、日本人というのは一体ルーツはどういうものであるのかということを一概教育されていないということが一番残念に思いましたね。

そういうことについてアメリカにおいでになって、年代が違いますから、どんなふうを受け止められ、また説明できたのかなと、さっきからちょっと気になったんですが。

鮎田：私の場合、アメリカに行った当時は、どちらかというとアイヌであることを隠していたのですよ。それでこの後話をしようと思いましたが、やはり日本で小さい時にちょっとしたイジメにあいまして、それでアイヌであることをすごく嫌に思っており、恥じていたのです。何も恥じる必要はないと、父親に何度も叱られました。そういう経験もありまして、アメリカに渡って5~6年以上過ぎてから、やはりどこに行ってもお前は何人なんだと聞かれました。当時は痩せていましたので、もう少し特徴がはっきりしていたのでしょう。今はちょっと、タヌキみたいになってしまいましたけど。

ニューヨークですと、ラテン系のヒスパニックがとて多いところなのです。そちらの人たちによく間違えられたり、よくスペイン語でペラペラ話されたりしまして、「違う、日本人だ」と何度も言いましたね。ある時、私の仲のいい友人からも、「お前は一体何なんだ、ほんとに純粋な日本人なのか」と聞かれました。その当時、その友達は大学生でしたが、向こうの大学では一応世界史の中でアイヌの歴史を結構具体的に教えています。でも、民族的なのか人種的なのかというのはすごくあいまいな形で教えられていました。向こうではアイヌをどう説明しているのかといいますと、骨格、人種的、文化が違うなどといったところなんです。もっと言えば、外見、文化圏、言語が日本語とは違うということを、はっきり教えています。そして、日本にそういった民族がいるということを一応勉強させられます。

話は戻りますが、私の友人に「純粋な日本人なのか」と聞かれた時に、正直にぼろっと、実は父親はアイヌだと言ったことをきっかけにして、私はとても熱心に自分自身のルーツを調べ始めました。それは、高校を卒業する間近でした。いつも学校が終わってから宿題をしに市立図書館に行き、片っ端から百科事典を開いて、A I N Uという文字を引いて調べたり、民族学や人類学の書籍の方からも北方民族のことなどを調べたのですが、今一つしっくりせず、何なのだろうという疑問が残りました。

それから北海道ウタリ協会の方へ個人的に問い合わせ、アイヌに関する資料を送ってもらいました。また、私が幼い時から聞かされた話などをいろいろ調べてみました。どの資料も人種的なルーツといったものに対しては、ほとんど触れられていませんでした。私は単に純粋に、アイヌはどのような人種に当てはまるのかが知りたかったのです。

自身のルーツ、アイデンティティを追求し始めてからは、アイヌであるということは隠さず、例えばあなたは何人ですかと聞かれた時には、アイデンティティというより、むしろナショナリティ（一般的にはナショナリティと言えば国単位になってしまうのですが、向こうでは人種的な意味合いを含めて聞いてきます）は、常にアイヌと日本人の混血だという形で説明して来ました。実際、アイヌというのは何なのだろうというのは、向こうの人もちろん詳しくは知らないですし、ましてや日本の多くの人たちも知らないことなのです。ですから、私もこうして一所懸命自分が思っていること、感じていることとお話しさせて頂きたい一心で今日は来ています。本を読むだけの知識では、結局のところその人の書いた、その人のビジョンの中から、ものごとを見る事にしかならないため、自分の経験を背景に置いてものごとを見ないと、私としては満足できないのです。人々、人種もあらゆる世界中の人たちを見てきましたし、そういった人たちとお話しをしてきた上で、その結果、私は今こうした形でアイヌという自分を見ているわけです。

今まで自分で自分を追い詰め続けてきましたので、自分を解放したかったのですよね。小さい時から周りの子たちよりも、あの当時は産毛でしたけど、なぜ毛深いのだろう、ましてや父親はなんで近所のお父さんと顔などが全然違うんだろうと。匂いも違うし、服を脱いだら熊じゃないかと思うほど違うのですよね。私の住んでいた近所の人たちも、昔おつきあいでいた沖縄の人たちも、「お父さん、アラブ人なの」と聞かれたことがありました。日本人だと伝えても首をかしげるばかりで、「北海道のアイヌです」と言ったときは、「アイヌ人なの」と聞き直し、何だか不思議そうな納得した表情で、うなずいていました。

さて、私がいじめられていた頃の経験話をします。小学校3年生か4年生の時に、日本史の教科書の中で最後の方に、ほんの少しアイヌのことが書かれていました。学期の授業が進まないと、必ずといってよいほど飛ばされる単元だったのです。たまたま学期末に、担任の教師にそこをやらと言われた時に、私は手を挙げ、「僕のお父さんはアイヌ人です」ということを先生や皆の前で話しました。それをきっかけに、イジメに遭いました。現在では状況がだいぶ変わってきたと思いますが、少なくとも10数年前は、まだ差別的な傾向にあったのだと思います。

そしてあと、小学生の時ですが、遠足に行く日に、お弁当を父親が届けてきてくれたことがありました。真夏でしたので父親は半袖を着て、全校生徒が集まっている

ところへ来たら、先生や生徒たちが一斉に驚いた表情を浮かべて注目しました。その時から、お前のお父さん何なんだ、何人なんだと言われ始めました。当時、アメリカ人などとの混血もほとんど居ませんでしたし、ロシアパッシングの時期で、外国人との混血などアイヌを含んで、そういった人たちは、あまりよく思われていなかったようです。これが私のつらい思い出です。

このことによって、アメリカで高校卒業の間近までは、「アイヌ」は私にとっての人種だと割り切れなかったのです。高校を卒業する時期を境に、私にとってアイヌとは人種なのだという割り切った考えに到達できたと実感しています。過去、私の中では、アイヌは日本人であり、黄色人種であるのに、なぜ全くといってよいほど容姿が違うのかといった疑問が常に引っかかっていました。しかし、実際にアメリカで色々な人種と接してきて、徐々に納得していったのだと思います。そういった感覚を得るには、日本や北海道に住んでいる人たちには難しいのではと思います。教育や経験を得るには、どうしてもお金と時間が掛かってしまいます。経済的に豊かな家庭に育っているアイヌの子供は、少ないのが現状です。もちろん、私自身も豊かな家庭で育った身ではありません。母親が無理をして、アメリカに留学をさせてくれました。

ですから、北海道でも奨学金制度を導入し、海外留学などを経済的に豊かではない子供達に体験させてあげられると、もっと精神的に解放されるアイヌの子供たちが増えていくのではと思います。周りの人たちと自分の容姿、親の容姿を比較して、コンプレックスを持ってしまうのです。あいまいな教育や知識のおかげで、一部の人たちの頭のどこかでは、自分はアイヌ民族ではあるが、異人種ではないといった否定的な価値観が強く根づいてしまっていますので、やはり何故違うのだろうといったところをはっきり認識できていないのが現状だと思います。私には、つらいことの一つでもあります。

アイヌ差別とは関係がなく、何故まわりと私は違うのだろうと、自分と周りに対する純粋な疑問がコンプレックスとなり、頭の中がいっぱいでした。そういった私のような思いを抱いている人は、北海道だけではなく他にもたくさんいるのではと思います。北海道で私くらいの年、又はそれ以下の年齢の青年、世代のアイヌの人たちをあまり知りませんが、やはりそういった思いが心のどこかにあるのではと感じてしまいます。

以上、そのことに関して何か質問はありますか。

質 問：うちの奥さんもアイヌなんですが、うちの奥さんの場合はお母さんが、小さいときにアイヌのうちにもまれて大事に育てられた和人です。そのお母さんは人種的には全く和人なんですが、心はアイヌなんですよ。お父さんは人種的にはアイヌなんですが、あまりアイヌのことは伝えなかったということです。そういう全く血をひいていなくて、でも小さい時からアイヌの中で育ったその母親の方が、アイヌの気持ちを持っていたっていう場合についても、どうなのかなって思うんですが。

鮎 田：その年代の方々だと、家庭の中でもアイヌの文化、風習みたいなものがまだ残っていた時期だと思われるので、そういった環境の中で育てられて認識を持たれたのだと思います。日系アメリカ人でも同じことが言えますが、二世になってしまうと人種的には日本人かも知れませんが、アメリカの国籍を持っているから私はアメリカ人だという日系人の感覚に、とても近いのではと思います。たとえ、日本にその人が戻ってきてても順応できないと思います。もちろん、人には性格というものがありますので、順応できる人もいるとは思いますが、はっきりいうと難しいところだと思います。その人の育った環境が、その人の帰属意識を作り上げるということなのでしょうか。説明がうまくできなくて済みません。

質 問：アメリカに行って、自分の中でアイヌであることのコンプレックスみたいなのを解消できたっていうのは、具体的にどんなふうなことでしたか？

鮎 田：一つは私の友達、知人の誰にも見せたことのない父親の写真などを初めて見せたときに、きっかけとなりました。私の父親は、阿寒でアイヌ式の結婚式を挙げてまして、そのときの写真などをいろいろとアメリカに持っていったのです。それを見せて、周りの評価を聞きました。それ以前は、とても慎重に自分の素性を明かしていましたが、徐々に慣れていったのでしょうか、ごく自然に人に言えるようになりました。自分の正体を明かすという言い方をするのも変なのですが、段々と気が晴れていったといえますか、解放されたといった感じです。

あと一つ、先ほどお話をしたDNAのサンプルの件もそうですが、古モンゴロイドという説も出ていて、北米・中米、まあ主に中南米の人たちというのが古モンゴロイドだといわれていますよね。古モンゴロイドと呼ばれている人たちは、先ほどお話の中で出てきた蒙古斑があります。アイヌはその人たちと同じ人種なのではという説もあるようですが、私としては納得のいかない説なのです。私の父親の家系は、とてもアイヌの血が濃い(ほぼ純血に近い)ので、人種的にはアイヌというものは一般的な日本人または古モンゴロイドとは違った人種だと思います。そういった説において、アイヌは古モンゴロイドではあるが、北米・南米などとは違う種類の古モンゴロイドだと主張するのであれば、古または新モンゴロイドを含めてもアイヌのみが特別な容姿をしているなどといった説明には、私はかなり疑問を感じてしまいます。

ちょっと分からないところなのですが、道東の人たちの中でも先ほど言いました中近東のような骨格や匂いのするような人がいますし、一般的な日本人みたいな人たちもいます。もちろん日本人的な容姿の要因には、歴史的な背景はありますが、北方の民族、例えばサハリンなどの先住民族とは古くから友好関係にあったらしく、文化的な背景などや人種的にも似ている人たちがいます。それが、東洋的な容姿の要因だと私は考えます。また、それとは全く逆の要因も考えられます。実際にはそのへ

んのことを含めて、どう説明をしたらよいのかは分かりません。

質 問：先ほどアイヌと和人の混血とか、そういうお話も出たんですが、アイヌのことをよく知らないような人が感想とかそういうものとして、アイヌの血が入っていれば、もちろんそれでアイヌ文化を受け継いでいたり言葉を受け継いでいるという見方をする人もいますよね。そういうところで無理やり縛られちゃっているというのが、私はおかしいと思うんです。血が入っているからどうのじゃなくて、個人の価値観とか

鮎 田：まあ一概には言えませんが、その人の育った環境及び親の教育などによって左右されるものでもありますね。

質 問：アイヌと和人の血が入っているんだったら、自分でどちらかを選ぶのもいいし、両方を知るのもいいし、そういうのは、その人個人の選択の中でというふうに私は思うんですが。

鮎 田：本当に、その通りだと思います。現代社会の中では、自由な選択肢が与えられています。私の場合、父親が木彫をする姿など、そういったことはいつも目にしていましたが、父が育った環境の話などそういったことは、父もつらい思い出があるみたいなのであまり話してがありませんでした。今では一緒に酒をくみかわす時などに、ぼろっと涙を流しながら過去のつらい思い出を話してくれることがあります。ある木彫師が、腹を見せてシャモ(和人)に刺されたなんてことをよく泣きながら言っていました。それ以前は、過去の悲しい話はあまり触れられたくないというのがあったのです。今は泣きながらも息子にそうやって話してくれて、うれしいと思っています。

父の文化的背景においても、家庭の中でアイヌ文化が根づいていたわけではないようでした。日本語で父親の両親が話をしながら、少しアイヌ語が混ざったりする程度だったそうです。アイヌの年配の方々の中には、内輪の会話が他人に聞かれたくない時などに、わざとアイヌ語で話す場合があるという程度だそうです。そういった環境で父も育てられましたので、アイヌ語もアイヌ文化もさほど知りません。どう見ても容姿が日本人ではないかもしれませんが、父はどちらかというと日本の文化の方が強く根づいている人間です。

私の母は、日本人の両親を持ち、日本の家系で育ちました。その私の両親との環境の中で、私はどちらかというと中学生までは日本人の文化圏の中におり、しかし父親はアイヌであり、私はアイヌ人との合いの子として育てられましたので、考えてみると複雑な思いはありますが、当時の幼い私には特に大きな疑問はありませんでした。言葉・文化は日本のもので育てられましたが、半分は血は日本人ではないと認識していました。

先ほどお話した事です、本当は恥じる必要のない自分の背景、それが割り切れるまで私にとっては長い道のりでした。自分を解放するにあたって、本来ならごく自然体でアイヌ文化のことをもっと教えてもらえれば良かったかもしれません。父がどのような環境、風習のもとで育ったのか、もっと話してほしかったと思います。そうすれば、もっと自然にアイヌである自分を受け入れられたかと思います。今になってようやくお酒の場ではありますが、ぼろっと語ってくれるようになり、それでもよしとしています。

質 問：お父さまが木彫をなさっているということですが、どういうものを作っていらっしゃるんですか？

鮎 田：主に工芸アクセサリーを中心としたものです。70年代か60年代くらいから白糠を出まして阿寒に行き、しばらく阿寒で木彫を修得し、土産物屋さんでペンダントなどを作っていました。一時期はアイヌの刀を再現し、その刀を売っていたりして、その大きな三日月刀を私に見せ、それがアイヌ独特のものだとよく言っていました。まだ日本刀が北海道に入る前のものを再現したなどと言っていたのを思い出します。あとは、いわゆるアイヌ模様の入ったアクセサリーなどが中心でした。

ご存知の方がいるかもしれないのですが、父は今福岡におり、ネットワークニサトという会の代表をつとめながら、福岡で民族交流といいますが、小学校などへ行って講演をしたり、その子供達に木彫を教えてあげたりしているようです。

質 問：先ほどのお話で子供の頃、アイヌだということでイジメられたという話を具体的にはおっしゃらなかったんですが、アイヌということでイジメられるのか、どういうふうな形でイジメられるのか？教育とか子供たちによく話すことによって、そういうことは無くなるものなのか？そのへんについてはどうお考えですか？

鮎 田：私としては、父親や私のような容姿の人がもっとその辺に大勢いれば、それは身近な存在になってゆくと思います。この生まれ持った容姿は拒否しようがないものであり、周りの人たち及び本人も、それはやはり慣れていくしかないですね。言葉の上では、「そんな差別感などない」などと言っても、実際にそういう人を見てしまうと、少し引いてしまうなどということが皆精神的にはありますから、そういったことが問題ではないかと私自身は思います。

私が小学校の時に受けたアイヌ差別とは、関東圏では毛深い＝アイヌだという形で残っており、むしろ先生など大人たちが言いましたね。アイヌは毛深くてどうのこうのと、いわゆる現代人とは違う「土人」というニュアンスを込めた形で小学校では教えられました。私は、その土人という言葉がとても嫌いでした。なんで他の人は文明人で私は土人なんだろうと。当時はチビ黒サンボが

流行していましたので、その土人という言葉にはそのチビ黒サンボを連想させられたような覚えがあります。その教え方に対する反感がありましたね。

質 問：具体的に友達からアイヌだとか言われていじめられたとか、そういうことではないんですか？

鮎 田：いえ、アイヌということ自体あまり知られていないので、アイヌと呼ばれてされたイジメは私の世代では特にありませんでした。少なくとも関東では。

質 問：そうですか。自分の意識の問題として、そういうふうにもいろいろとっていたという理解ですね？

鮎 田：そうですね。つまり、私がイジメられる要因は外見だったのです。だから、皆と同じプールに入りたくなかったですね。周りよりずっと私は体毛があり、皆からサルだのゴリラだのと言われましたから。

質 問：そういうことは常に言われたんですか？

鮎 田：はい、私が肌を露出した時には必ず。身体的特徴をネタにばかにされるということは、少なくとも私の中ではイジメだったのです。つまり、子供には大人のような差別意識はありませんが、いわゆる差別の一つには違いはありません。差別というものは本来、認識していることを前提に行うものですが、子供の間では単純に皆と違うというところが取り上げられ、そしてイジメに現れると思うのです。

これから日本はどんどん国際社会になっていきますが、いい点もあれば悪い点もいろいろあると思います。でも日本人として、もうちょっと国際的な視野で身近なものを見てほしいと私は常に思います。一度未知のものを知ったり体験してしまえば、知らないよりは楽ですからね。違うものを違う目で見るのは悪いことではなく、その違いを純粹に受け入れるという体勢がすごく大切だと思います。違うと感じるのは、当たり前のことです。もちろんそれは疑問に思いますし、窮屈なものです。純粹に違いを受け入れられる勇気が必要だということです。私は割り切って境界線の存在しない形で、皆さんとお付き合いしていきたいと思っています。現時点では、それがすごく最善な差別社会の解決法、解決法とまではいかなくとも解決の手段の一つでもあると思っています。

アメリカに9年間の滞在の後、日本に帰国後はアイヌのことにどっぷり漬かりたいと思う時期がありました。アイヌ料理店で「レラ・チセ」というところが当時早稲田にあり（その後、中野に移転）、そこがテレビでちょっと取材されていました。それでテレビ局に問い合わせ、レラ・チセに行ったことをきっかけに、去年はスイスのジュネーブで先住民（族）作業部会にも私は参加させていただきました。日本の先住民のアイヌ民族だということで、スイスの方に行かせていただいたのです。そこで

の私の単純な感想は、天下の国連の中で問題を扱ってはいますが、何だかオプショ的な扱いだなということです。ですが、世界の先住民(族)が世界的に取り上げられるようになったのは、ごく最近のことですから、しょうがありません。

私は今、コンピューターを取り扱ったネットワークに関する仕事をしていることもありまして、去年の夏頃にインターネット上に「ニソロ」という題名のホームページを作りました。それは、アイヌ民族を中心テーマとせず、一人の人間として人間そのものを追求したいという思いにかられたのをきっかけにして立ち上げたものです。私としては、アイヌという狭い世界の中から自分・他人・社会を見つめるのではなく、本来のアイヌというキャラクターを持った人間として見つめ直してみようと思ひまして、そのホームページを運営しています。何も構える必要などなく、ごく自由な自然体となってものごとを考えれば、きっと豊かな発想として反映するのではないかと思います。まだそこところは詳しく説明はできないのですが、自分自身の成長も含めて、そういった意味でホームページの製作にあたりました。

もちろんアイヌ民族の紹介も兼ねていますので、これからアイヌの文化、アイヌ民具などの写真を集めまして、そのホームページ上に載せようと思っています。現在、ホームページ上では掲示板やチャットなどを通して、いろいろな方々から寄せられたコラムを掲載したコーナーを設けています。徐々に人は来てくれています。が、まだまだ中途半端なところなのが現状です。ですが、そこを通して自分を見つけていきたいと思ひますし、来た方々も本当の自分のあり方などを見つれたり認識していただき、お互いいろいろな意識の交換をしながら、向上していきたいなと思っています。民族、社会、精神といったことをすべてひっくるめた形で話し合いながら、ということなのですかね。

質 問：インターネットのホームページを開くときに、その中で、例えばアイヌのことでいろいろ悩みを持って、いろいろ迷ったりするときに、私はこういうふうにしてきましたよと、体験を踏まえた形でアイヌの人々の理解を訴えるという方向が一つあると思うんですね。そうじゃなくて、アイヌについて一般の人に理解を求めべきなのか、それとも民族的に悩んでいる人に対して解決の道を示すのか、両方なのか。開設の目的っていうのはどういうものですか？

鮎 田：一概には言い切れませんが、実際には難しいところもあります。一応、両方を合わせ持たせたマルチな形であつたらいいなと思います。あとは、来てくれた方々といろいろな話題を交わし、その中でまあアイヌの話題が投げかけられたら、アイヌのことを話し、もう今は隠すことも何もないですから、堂々と自分の思ったこと、人とは違った意見も出して、お互い対等な立場で対話がしたいと思っています。自分または他人の意見にお

いて、認めるところは認めて、認めてもらうところは認めてもらうといった、お互いが気持ちよくやり取りができる場を提供していきたいと思っています。

質 問：みなさん来なさい、ということですよね？

鮎 田：そうです。アイヌ民族ということのみを売りにしているホームページではないので、あくまでも多種多様なもののあり方、存在を受け入れるという体勢、精神が自然体な形となって民族、社会などを見つめ直し、そしてお互いの意識の向上ができればということなのですよ。民族だけではなく、万物に対してです。ちょっと掘みにくいフリーテーマのホームページなものですから、申し訳ありませんが説明もしづらいのです。

質 問：日本の社会っていうのは、すごく閉鎖的な社会だって言われます。特に、日本では国語っていいですよ。日本っていう国全体を考えるんだったら、国語の中にアイヌ語が入らなきゃいけないはず。国語の中にアイヌ語とヤマト語っていうか、それが入らなきゃいけないのに、ヤマトの言葉だけをもって国語っていう言い方自体が、すごく閉鎖的だというのが私の考えです。要するに認めてないわけですよ、アイヌ民族のことを。本当にすごく閉鎖的で恥ずかしいなっていうふうに思っていて、やっぱりそういうのを自分たち和人が変えていく努力をしなければというふうに思っているんです。

アイヌ人として生きること、和人として生きることでも自由だけど、それを前提として本当に自分から進んで選択できること。悲しい選択じゃなくて、自分から喜んで選択ができるような社会に日本をしていかなければならないのではないかなと、私個人としては思ひます。だから、そのためには国語っていう言い方、そういう根本から変えていかなければと思うんです。日本の社会に対して望むこととかがあったら、意見をお願いします。

鮎 田：理屈でいえば、アイヌ語も国語であるということですが、その国語という捉え方では、根本的な問題を考えていられませんかと思ひます。つまり、アイヌそのものは、もう既に日本の所有物の一つという考え方にもなりますよね。少なくともアメリカでは、国語という発想はありません。アメリカでは、Englishですよ。アメリカで、一番の標準語は英語です。日本でアメリカ式に言えば、国語は日本語というべきだということですね？

質問者：いえ、日本で国語って言った場合に、日本語しか国語として認めないという前提があつて、国語っていうふうにされているということです。

鮎 田：それでアイヌ語もあるし、ということですか？

質問者：公用語として日本語を使うというのはいいと思

うんですが、国語となったらそれはちょっと。

質 問：今おっしゃったことですが、日本人の中にも方言とか、なまりってありますよね。ほとんど無視されているから、似たような問題じゃないでしょうか。私も沖縄に長い間いましたからよくわかるんですが、琉球語は、確かに日本語なんですよ。私はよそから来たもので、まるっきり通じなかった。つまり、そういうものも国語の中では否定されてきたんですね。共通語、昔は標準語と言いましたが、私も地方出身ですから、東京へ出てきて未だにお国言葉を出すと、時々相手の人から奇妙な顔をされる。その時には言い直したり、翻訳し直してしゃべってます。だから、そういうのはちょっと避けられないと思うんですね。

それよりも、今おっしゃったことには言葉の問題もありますが、私は日本人というのはどういう血筋でできているのかを問題にしたいと思います。具体的に言いますと、中尊寺に藤原氏の像がありますよね。あの顔を見た瞬間に、私は「あ、これは蝦夷の血のかなり入った人だな」と思ったんです。そういうことを言ったら、一緒に行った人がいやな顔をします。この地方にいる人も蝦夷の血が相当濃いはずだ、じゃなかったらコリアンかなと言ったら、更にいやな顔をします。我々の血の中にあるものと言ったら、一番多いのはコリアン系でしょうね。それから、その次に中国系もあるでしょうかね、満州を含めて。それから更に、先住民からいったら今のアイヌ、クマソ系ですね。そういった部分の血が、少なくとも4分の1ずつぐらいあるんじゃないでしょうか。そういうことを中曽根さん以下、肯定しようとしないうところに、国語を含めているような問題があるんじゃないかと私は感じているんですが、どうでしょうか？

鮒 田：実際、最近発表された日本人のDNAのデータ結果らしいのですが、日本人といっても70%くらいがいわゆる中国・コリアンのDNAで、ほかの30%か25%がいろんな民族、人種の血が入っているという結果が出ていますね。アイヌはまた系統が違うというのが、研究結果らしいです。

質 問：日本には、本州にいるいわゆる日本人と称する人の他に、沖縄、北海道のアイヌといわれている人、それから朝鮮における一般的な人、それから中国における漢民族がいるという結果でしたね。母集団が相当小さいんじゃないかと思うんです。それでも中国の場合は国家の中で40%の人が同じ系統です。韓国が30何%ですか。日本の場合は中国系の人が20何%。まあ、どこまで信用するかですけど。韓国系が23%ですか。そしてアイヌ系の人が8コンマ何%。それからクマソ系というか現在沖縄にいる人などと、われわれの人種は、そのぐらいものすごく雑種なんですよ。それをすら学校教育では一言も触れようとしません。

東京においても、例えば深大寺がありますよね。深大寺を作ったのは韓国の人です。調布とか狛江とかという地名があるのも韓国の人がいたからです。そういうことを認めたら、いろいろな問題になるんじゃないかと思うんですが、ほとんどそういうことは現在の学校において、我々の時代もほとんど触れられていない。ましてや新聞とか現在の政治は、そういうところを避けて通っているわけですよ。これは私個人だけの考えかなと思うんですが、そのへんはアメリカにおいでになる時とか、こちらに帰ってこられた時に、どういうふうに感じられましたか？

鮒 田：感想ですか？権力といいますか、ピラミッド構造が作り出した結果ではないかというのが私の正直な気持ちです。この巨大な国単位での組織を作り出すことによって、無数にあるものを放置しておくより一まとめにした方が、運営や経営がしやすいといったようなことがあるのではないかと。つまり、そういった権力構造が作り出した結果となっていると思います。それは、何百年にも渡る歴史の中で作り上げられてきたものだと思っています。弱者には、非常に皮肉なものです。

質問者：今そういう話をした理由を言いますと、約50年前、沖縄にいた時分のアメリカの沖縄に対する政策というのは、明らかに我々、現在日本人と称しているものを琉球人とは全く違った人種であるという教育を相当やりました。というのは、当時返還する意志がなかったからです。だから返す意志がないとすれば将来、独立国としてやっていくという意志が、琉球にある軍政府や中心人物にはあったんじゃないかと思うんですね。それが、いろんな問題があって、それからベトナム戦争もありましたから、アメリカの政策が大幅に変わって来たんじゃないかなと私はみてるんです。そういうのを見て、一個人がいくら考えてもどうにもならないような問題と申しますか、国の政治に左右されるような気がするんですね。だといって放っておいていいかと言えば、やはりものごととは解決しないと思います。

鮒 田：そういった間違った国の政策を止めさせられる力は、一個人にはないかもしれません。何かを一度政府が決めて実施されてしまった場合など、やはりそうってしまった時にはもう手遅れであり、大々的に一般で誤りを取り上げてもらうということは困難でしょう。今できることというのは、例えば私の場合、こういった場を利用することしか手段は無いのかもしれない。ほんの少しずつでなら、真実を訴えることはできると思います。真実は、常識化させてゆくべきだと思います。もっと認識を深めるということですかね。

ここで一つ、そういった話も含めまして、皆さんに逆にちょっと質問を振りたいと思います。ご自分のアイデンティティをどう認識し、それをどう思っておられますか？私としては、私自身はアイヌであり、日本人であ

ります。でも、日本の中でもいろいろ分かれています。国籍が日本でも、アイデンティティは別な時もあります。アイデンティティという意味は、一般的には身元とか正体とかいった意味ですので、皆さんはどういうふうに捉えておられるのでしょうか？

受講者：私たちは、自分たちが日本人だということは当然のこととして思ってますよね。だから、人種とかということはあまり考えたことがないんです。外国で暮らしたりしたような方は、ちょっとは感じると思うんですが、ほとんど私はそういうことを感じないです。鮎田さんは堂々と、ご自分がアイヌっていうことをおっしゃられますよね。それは、どういうふうにしてご自分はアイヌだっていることを皆さんの前で誇りを持っておっしゃったのか？ 誇りを持たれたんだったら、どういうところで素晴らしい民族だと思われたのか、そのへんを伺いたいです。やっぱり、皆が知ることがすごく大事だと思うんですよ。そういう意味で、そういうことを皆さんに伝えて頂きたいと思うんですけど。

鮎 田：私のアイデンティティの元といいますか、それは両親ですね。先ほどアイヌ人であり、日本人でもある。つまり両方共に違うアイデンティティの持ち主だからこそ、私のような見方が生まれて来るのかもしれない。ですが、私が大切だと思うことは、先祖まで尊重するということです。先祖は自分自身の誇りとして受け継いでいるのだと思います。アイヌの文化自体のことは、私は実はあまりよく知りません。ですが、過去の先祖の存在に感謝しています。何故なら、今こうして私という存在がここにあるのは先祖のおかげだからです。

今まで、色々なアイヌに関わるイベントに参加しながら、徐々にですがアイヌの昔の人たちはこういった暮らしをしていたのだということを学んでいます。現在はもうアイヌは日本人として暮らしていますので、個々人の帰属意識みたいなものをどう持って生きてゆくかは、その個人の意識次第だと思います。実際は、いくつかの問題を抱えていますので難しいのでしょうか。まあ、生きるためには必要なものではないです。しかし、生きる上では、大切だと私は思います。

受講者：この時間の前のセミナーで、昔からの言い伝えのことをいろいろ伺ったところですが、お勉強なさって誇りを持っていただきたいなと思います。

鮎 田：私の意識がそうである限り、そうですね。私としては、アイヌも日本も両方好きですね。常に両方を尊重しています。それは自分のものであるから尚更のことですが、そのへんのことは、ごく自然に受け止めております。変に片方に傾くということは、特にしたくはありません。その時の気分で傾くってことはあるかもしれませんが、私自体、勉強不足ですので、進んで精通して行くべきだと思っています。

実は、アイヌ語はほんとうに興味ではない限り、勉強する必要はないかなと私は思っています。むしろ、残すことは大切です。ですが、私は学者でも活動家でもありませんので、義務はないと認識しています。実際、アイヌ語を使う場がなければ覚えてもすぐ忘れてしまいますし、生活に必要なわけではありません。ですが、そういったところから改善すべきだとは思います。どうすれば良いかはわかり兼ねますが、アイヌ語や文化を日常生活に浸透させられるのであれば、可能かもしれません。

皆さんは、自分が何者かということを誇りに思う必要があると思われますか？ 何者であるかということ、自分はこの人物だという地点から考え直すことは、実際なかなか機会はないかも知れません。その地点から、今回こうやってお話させていただいていますので、私だけではなく、まずはそこから一緒になって考えて欲しいと思います。皆同じ人として、同じ土地に住んでいる平等な人間として。

受講者：私は北海道出身なんですが、和人で、でもアイヌの文化の中で育ってきました。そこでは昔からの言い伝えは特別なものではなくて、日常の生活の中にあるもので、知っている人たちは当たり前すぎて気付いてないんですよ。私の友達もアイヌで、おばあちゃんもいて、教えてもらっていることというのは、私にとってはびっくりするようなことでも、友達にとっては当たり前だったり、私自身の近所もそういう環境なんです。

宗教についての考え方としては、アイヌは何にでも神様がいらっしゃる感じが私自身一番好きなんです。

鮎 田：アイヌの宗教観といいますか、万物に対する考えは私も小さいときから聞いています。父は、すべての物は神であるという言い方をしますね。まあコップにしろ水にしろ、全てはカムイとして敬う心を持ち、回りの物すべてに対して敬う気持ちを持つと言われたことがあります。

アメリカでは宗教的にはキリスト教であり、人が全てのものより偉く、その他は人のためにあるというようなことを経済学でも教えています。キリスト教の考えが元なのでしょうが、アイヌとアメリカの考えを比べると、私としてもアイヌの方がより納得のいく考えなので、受け入れやすいです。

受講者：日本人にあなたのアイデンティティを教えてくださいって言っても、ほとんどの人がつまづくと思うんです。昔のことですが、新聞とかテレビとかの取材が来て、記者の人がアイヌ語教室の中学生に、「この子たちはどういうふうに思って勉強しているんですか」とか聞くんですね。それで、私が印象的だったのは、家ではアイヌ語使ってるのって聞かれたときに、私ともう一人和人の子がいて、あとは混血だったのですが、私は和人の人で、「家では、特に代々伝えられてきたっていうようなことはないんです」って言ったら、もう興味・関心が全く

それちゃって。同じ勉強をしているにもかかわらず、アイヌの血をひいている子だけ対象になってしまっているの、じゃあ私は何なんだろうって。血が入ってなければいけないのかなとか、じゃあアイヌの方がいいんだろうか、日本人の方がいいんだろうかってすごく考えて、アイヌ語教室の中でみんなで言い合ったことがあったんです。

自分のルーツっていうか、ほんとに日本人は混血がすごいと思うんですよ。アメリカだとアフリカ系とかヒスパニック系とか、そういうふうに聞きますけど、何系であるっていうことも日本人は考えないと思うんです。

鮎 田：それは、珍しいから注目を集めたのでしょう。しかし、人は見世物ではありませんよね。自分を尊重することによって、好きになることによって何だろうということも同時に湧くと思うんですよ。そこから当たり前の感覚にしながら、アイヌ文化にしろ何にしろ触れてほしいなと思います。そうすれば私も他人も対等に付合えますし、構えられてしまうと私自身も構えてしまい、すごく不自然で窮屈なお付き合いになってしまうのだと思います。とはいっても私は伝承者というわけでもなく、聞かれても困ってしまう部分があります。まずは自分を尊重し、同時に回りを尊重してほしいなと。まず自分を尊重できなければ、もちろん自分なんて好きにはなれません。他人に対しても同じことが言えるのではないのでしょうか。

受講者：自分は何者かという問題なんです、自分は和人としてアイヌ語とかアイヌ文化を一所懸命勉強しているところなんです。昔私は、どちらかというとアメリカなんかに憧れて、短期間でですけど実際向こうに行きました。そのことで、逆に自分は何人なのかということを考えるようになりました。それまではアメリカのそういう文化に憧れていたのが、逆に日本文化をいろいろと勉強しますね。日本の文化にも、いろいろ愛着というかそういったのが改めて持てるんです。だからお辞儀であるとか敬語とか何でもいいです。正座とか畳とかですね、そういったことも大事なものだなと思います。アメリカでもいいしアイヌでもいいし、そういった文化はそれはそれで面白い。

私は香川県出身で香川の文化、例えば讃岐うどんとか、讃岐弁とかありますよね、そういったものをいいなと思うし、大事にしたいなと思います。例えば自然を大事にするとかっていう考えは別にアイヌだけじゃなくて、どこだってそういう考え方はあるわけです。アイヌ語とかアイヌ文化を勉強することによって、自分たちの背景、文化を何なんだと逆に考える。そういう意味で違った文化とか他者に出会うことは、やっぱり逆に自分は何なんだろうということを考えるきっかけになるんじゃないかと思います。

鮎 田：その意見には同感ですね。自分は当たり前すぎ

る存在であるから、きっかけとしてまずは、他のものを好きになるのも一つの手ではないでしょうか。自分のいる環境自体に、文化的なものに対する価値観が薄れてきているからこそ、別の文化の方が好きになるといった現象が起きているのではと思います。親から子へと受け継がせる大切なものを、もっと一般的な家庭でやってほしいとか、その行為を尊重してほしいと思います。アイヌのみの問題だけではなく、今の日本国内の、全てにおいてのことだと思うからこそ、子に受け継がせるものというのは、すごく大切に持っていてほしいと私は思います。

受講者：アメリカ人は、アメリカはメルティングポットじゃないって言うんですよ。アメリカはサラダボウルだと。つまり、いろんな人種がいて、混ざり合ってるけど、溶けない、一緒にならない。みんな自分のアイデンティティを主張してバラバラ。それでいうと日本は、むしろメルティングポットなんですね。みんな和人。さっきもそのお話にあったように、日本人は雑種民族の雑種文化なんです。加藤周一さんも昔から言ってるんですが、だから本当はアイヌと和人というのはおかしいんで、アイヌと雑種民になっちゃうんですね。本当は僕なんか色が黒いから南方系だと思うんですが、中国系とかコリアン系とかいろいろいるわけですよ。一緒になっちゃって、いわゆる和人というのが生まれて、個々の文化はみんな消えちゃってるんです。その点アイヌっていうのは溶け合わなかった。悪く言えば、はみだし者なんです、よく言えばそれだけアイデンティティを持ってるから、それだけ文化が消えなかったわけですね。

和人としては、北から来た人、西から来た人、南から来た人、みんな一緒になって日本に住んでるわけです。だけど、アイヌは先住民族だって言うけど、実際には北から来た人、西から来た人、南から来た人、どこの人たちが一番早く来たかっていうことはわからない。実際には、ほとんど一緒に来たんだろうっていうことですね。特に、北から来た人が先だとか、南から来た人が先だとか、そういう証拠は何もないですよ。理由もない。だからアイヌの人が先住民族だっていうこと、日本にアイヌの人が、どこから来て先にいて、他の南から来た人や西から来た人が後からその人を追い出したっていう話は、おかしいと思うんです。

鮎 田：アメリカのようなそのサラダボールも行き過ぎですが、私の考えでも、アイヌももちろんどこから来てるはずですよ。

受講者：ただ、そこでみんなが一緒になった時に、文化的な衝突があって、その中でアイヌといわれる人たちは混ざり合えなかったわけです。それで、はみだしちゃった。残りの人たちは、混ざり合っちゃって、ほとんどもう区別をしてないわけですよ。例えば明日香村ですか、あのへんの住民の8割ぐらいは帰化人、要するに朝鮮系

らしいんですよね。あのへんの人たちは、今の在日朝鮮人みたいな差別は無いんですよね。要するに和人であって、朝鮮人じゃないですもん。血的にも、もう交じり合っちゃってる。和人としての文化しか持ってないですから。

だから、クマソ系とか何とか言っただって、まあ多少言葉なんか違ってても、見た目がちょっと違ってても、意識的には要するに日本人なんです。ほんとにメルティングで、溶け合っちゃってるんです。ある意味じゃ、文化が消滅しちゃってる。固有の、元々来たときの、自分のこれがルーツの文化だっていうのが無いんです。アイヌの人たち、あと琉球の人たちなんかは持ってるかもしれませんが、ほとんどははっきり出てるのはアイヌ系だけなんですよ。

鮎 田：アイヌも、そのメルティングポット状態です。そうしてメルティングしていくのも時の流れであるかもしれませんが、最後まで自身には選択肢があると思います。

受講者：文化は、まだ確実に残ってるわけです。言葉も残っているし。

鮎 田：形のみは辛うじて残ってはいますが、実際、既に家庭では使われていません。アイヌ語で子供を育てている家庭は、今のところないでしょう。

受講者：それはそうですが、我々にはもうそんなの全然ないんです。意識的にも何もないですよ。だから、アイヌの文化は、日本人として日本の文化として守るっていうのが大事だと思うんです。

鮎 田：そのお気持ちとても有難く思います。ですが、当事者(アイヌ)がもっと積極的に受け止めるべき問題であり、その環境さえあれば私はつくづく思います。

皆さん今日是对話していただき、本当にいい経験をさせてもらいました。どうもありがとうございます。




[contents](#)

[MAIN](#)

Welcome to the NISORO site!

just be free to open up your heart with imaginat

[NISORO CONCEPT](#)



NISORO CONCEPT

[ニソロなお知らせ](#)



ニソロなお知らせ

[ARTIFACTS](#)



ARTIFACTS

[POSTERS](#)



POSTERS



BBS



http://www.d1.dion.ne.jp/~elskain/nisoro2_new.htm